

テンション高いIS！

桜山 梨

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

常にテンション高い山守 翔は色々しながら楽しむお話。

### 【注意】

テンション高くて現実に居たらまさにキチガイな主人公です。

主人公はテンション高いだけでなく、さらにさらに！とても強いという設定です。

# 目次

テンション高い山守 翔はIS学園にて	1
大暴れ	1
第2話	6



# テンション高い山守 翔はIS学園にて大暴れ

はい！皆さんこんにちは俺は鐘森 翔！至って普通だった高校生！あれえ？此処はどこだあ？自問自答しちゃうぞおー！此処はIS学園なの・だ！（ドヤア）俺はISを動かせる男、二人目なのだ！

「じつ、自己紹介ぐらいいしますから」

おやおよ一人目さんが自己紹介を始めようとしているゾ。

「えつと……織斑一夏です。」

えつ?!もつとなんかないのおく。

「お前はろくに自己紹介も出来んのか」

「ス、スルト！」

「誰が北歐神話の巨人だ、馬鹿者。」

バコン！

「痛てえー！」

俺、出席簿の新しい使い方を覚えたぜ！

「千冬様く」「あなたのためなら死ねますく」

「あく、何故毎年こんな馬鹿共が居るんだ？次、鐘森。お前はすっかりと自己紹介しろ。」  
えく、そう言われたらしたくなくなるじゃん！真面目にやーらない！それじゃあこん  
なんでどうだ！

「ワタシは魔女教、大罪司教ー 『怠惰』担当、○テルギウス・ロマネコンティ……デス  
！」

「「ワハハハハ」」

良し！ウケた！わあーい、わあーい。でも全員じゃないな。知らないのか。

先生は？

『ぶち』

なんの音お？こころは

「あー！水素の音」

「「ぷっ」」

何故かみんな笑いを堪えようとしているみたいだけど滑らなくてよかったあー。

『ゴゴゴゴゴ……』

ん？

「お前はろくに自己紹介が出来んのか!!」

バコン

痛あーいよお。まさに

「脳が震える震える」

「「ウワハハハハ」!!」

イエーイ

「お前は懲りん様だな」

パシ

「流石に2回目はきついですよ」

俺は手で出席簿を受け止めた。いや、凄いな出席簿。

「ありやく威力強すぎてちよつと手の皮剥けて血出ちやつてるよ。あはは、あははは。」

なかなか驚いた顔をしてるねえ、皆さん。

「僕ちんきちんと2度目は学ぶ子なのさ」

「「いや、じゃあさつきも真面目にしろよ!!」」

あれれれ?

「お前は放課後教室に残れ。」

うわあ、怒られちゃうのかなあ、それとも

「告白ですかあ?」

「んな訳あるか阿呆!」

パソコン

危ない危ない、3度目であゝ。手で止めるのはさつき痛かったから避けたんだけど……。

ミシミシミシ……バキ

「先生。加減してくださいな、加減。」

「もう良い。山田先生、すみませんが机新しい物に後で取り替えてください。」

キーンコーンカーンコーン

「あゝ休み時間だ!」

教室の中歩いてみよう、誰か話してくれるかなあゝ。

「まだ挨拶をしとらん!!席に戻れ!!」

■ □ ■ □ ■ □ ■

「困ったちゃんになっちゃったヨウ!みんなが滅茶苦茶話しかけてくるんだヨウ!俺つばもしかして人気者になったのかヨウ!いやあ、照れますねえだヨウ!」

「いや、そんなんじゃないんだヨウ!」

みんな乗ってくれたゝ

「ありがとヨウ!」



「ハイヨウ！」

## 第2話

やあ、こんにちは！敬愛なる俺の信徒たち！

えっ？そんなものないってえ？今から作るのさ。歴史は常に塗り替えられる。

（本人いいこと言ったつもりです。）

「イチカ、チョットハナシガアルンダガイイカ」

「ホウキカ！ヒサシブリダナ」

どうやら俺の前の一夏くんは幼馴染と喋っているらしい。おっ？教室から出ていく。尾行でもしよっかな？

「……つとー！」

「ん？俺のファン28号？」

「その28という数字はどこからでてくるんですの?!それに『ファンか?』なんて！

……。ち、が、い、ますわ！ちよつと！聞いてますの！」

「聞いてない。そーゆーの要らないんで、ハイ」

声をする方をすら見ずに返事をする。教室の端から椅子からズテツと転ぶ音。音のなった方に振り向こうとしたら視界にチヨコルネが映る。何これ？（ゴロリの表現）

作った人には悪いけど正直言って…

「不味そう」

「な〜に〜がですの?! さつきからあなたは奇怪なこうどうばかり! どうして男というものは…、」

「いやだつて何このチョココルネ。艶々しすぎ、髪の毛みたい。いや、チョコがないからもうこれはチョココルネではないな! (名推理)」

「完結したところで (自分の中ではの話) さらなるネタを探そう!」

「あ、あなた。わ、私の髪のことを言っているのですか?!」

「いやいや、チョココルネに対してですけど?」

「?」

「?」

「会話が、噛み合わないだ、と?!」

「やつと会話をしている相手の顔をみる翔。」

「あく納得納得。セシリアさんはチョココルネなフレンズなんだね! (ゴリ押し)」

「いや、それ理解してないから。チョココルネなつてどんなんだよ……つて髪型か」

「みんな、台本持つてんの? 何回練習したの」

「してない。私達はただ流れに乗るだけ……」

ふうーん？！IS学園だしね！

「いつかきつと できるよねしんじていれば できるよね おねがい きつとだよ  
まってまーす！」

「それ関係ない…。えっ?!私一人だけ?なんで?!神よ!私を見放されたのですか?何故  
です!」

暫しの沈黙。はあ、この空気、破らないといけないよね!

作者「誰も頼んでないンゴ……」

「君は空気読めない系のフレンズなのかな?」

「「あんただけには言われたくないでしょう(言われたくない)」「」

なぜだろう、このやり取りが楽しい。

「やめられない、止まらない!かっぱエビせ○」

「「隠すところ違う!」「」

それにしても

「この会話って誰が発端だったっけ?」

「「知らない。」「」

「oh……」

「私……、空気ですの？」

一同「ごめん、忘れてた」